
二次元野郎と・・・

勿論西村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二次元野郎と・・・

【Nコード】

N0364Z

【作者名】

勿論西村

【あらすじ】

俺は二次元しか興味ない。

しかしそんな俺がある日先生に呼ばれ

クラスメイトの不登校になった宮木京子を学校に呼べと言われた

その理由は前まで俺が不登校だったからだ

そんな理由で面倒くさい事をする

宮木とミッドナイト

キンコーン……

授業終了チャイムが鳴り響く

そして俺が伏せていた顔を上げると担任の教師と目があつた

「佐藤君、ちょっと来て。」

佐藤君とは俺の事である。

先生に呼ばれるがまま俺は（面倒くさいが）席を立つた
俺が先生の前に立つ。何の説教だ？

「宮木さんの事なんだけど。」

小さく先生が言う。

宮木京子、彼女は俺のクラスメイトで今現在学校には来ていない。
所謂不登校と言うやつだ。

なんて羨ましいんだ。

「羨ましくありませんよ、」

「人の心の中を読まないでください。」
すると先生がぽかんとする顔をして

「口に出してましたよ。」

「んな、——で、宮木がどうしたんです？」

俺が本題に戻す、すると先生が顔を曇らせて

「彼女を学校に呼んでほしいのよ」

「無理ですね。」

不登校になると、殆んど復帰するのは無理だ。

「でも、キミは不登校から復帰したでしょ？」

そう、俺も前まで学校を休んでいた。休んでいた！

「俺の場合は不登校ではなく長期休暇です。」

「そんなの同じでしょ！」

違う、俺の場合アニメを見たいがために学校を長期休暇しただけだ。

ちなみに自分で言うのもアレだが、俺は結構もてる。

「貴方の容姿なら彼女もおとせるはずよ。」

「先生。俺は二次元にしか興味ありません。」

苦笑いを浮かべる先生だが、コレは事実だ。

これまでに数回俺は告白されたがすべてを二次元を理由に断った

「とにかく、彼女の家に行ってみてください」

「は？」

「・・・・・・お願い、」

チツあそこまで（土下座）されたら断れねえじゃねえか

俺はぶつぶつ言いながら、もらったメモに書いてある住所に向かった
ちよつと迷いながらも何とか到着した。

玄関の前でインターフォンを押そうとする、がやめる

もし出てきたらなにを言うんだ？

「学校に来てくれ」・・・・・・か？

そんなこと言われて出てくる奴なんではないよ。

「キミ、何してるの？」

といきなり背後から声が聞こえ、ビクンつと驚く

振り向いてみると、20後半から30前半位の女性が立っていた

両手にはスーパールの袋、買い物帰りとみた

「京子のお友達？」

「あ、いや・・・そ、そうです」

俺は宮木の母親と思われる女性に頭を下げる

「どうぞ上がってください。」

そう言うのと玄関扉を開けて中へ招いてくれた

玄関口は広く、片付いていた

スリッパを借りて、リビングに案内される。

麦茶を出してくれたのでいただく

宮木の母親が向かいあいの椅子に座り

「京子はね、昔はこんな子じゃなかったの、」

宮木の事を話してくれた、いや語ってくれた
どうやら部屋にひきこもっているようだ。

引きこもりだした理由はあるアニメに釘づけになって出てこないよ
うだ。

「一度、京子さんに合わせてくれませんか？」

「・・・出来る限りの事はするわ」

そう言うとりビングを出て2階に向かった。

部屋のドアには『きょうこ』と書かれたプレートがある

コンコンと母親さんがノックする

「京子、お友達が顔を見たいって・・・」

そう言うが反応が帰って来ない。

するとしばらくしてガチャツと鍵が開かれる音がするので

母親がドアを開けようとする

ガッ、ガッ・・・

今しめたのか！！！！

あの音は開く音じゃなくて閉める音かよ！！

「京子お願い、もう一度開けて、」

母親さんが泣きそうな声で言う。

相変わらず声はしないが、

何回か鍵がガチャガチャ鳴る。

閉めたり開けたりしてるのか？

そしてガチャ音が鳴り終わると

きいゝゝゝと音を立ててドアが開いた。

それを見て母親がしたにおりて行く。

部屋の中はクーラーがきいていてカーテンが閉められ電気が付いて
いない、唯一の光はパソコンの画面の光。そして、ドアがきいゝゝ
としまっていく、

ボタンツと閉まりきると一気にガチャガチャ……と鍵が閉まる音が何回も連続する。

「なっ！」

俺が振り返ってドアを見ると暗証番号やら、カードキーやらの鍵が何個も付いていた。

「凄いな、俺はここまでしなかったぞ……」

「貴方誰？」

画面を見ている宮木が俺に聞いてくる

「俺か？俺は佐藤康。」

てか俺主人公だよな？今フルネーム出たぞ！？

「何しに来た？」

「話しに来た。……うーん何のアニメ？」

アニメの事を聞かれぴくんと反応する

すると宮木は画面を見たままアニメの事を話してくれた

「『ミッドナイト』よ。」

「ああ原作：藤島夜先生の三作品目のライトノベルアニメか」

俺はほぼすべてのアニメを見て、原作も好きなのは見ている

「知ってるの？」

「いや、コレくらい一般常識だろ？」

その言葉で俺を同志と思ったのか、椅子に乗ったままぐるっと回転して俺の方に向き直る

「アニメ全話見た？」

「勿論1期から今やってる3期まですべてにおいてリアルタイムで見てる。」

暗い部屋に目が慣れてきた、よく見ると部屋の壁にはミッドナイトのポスターが棚にはフィギュアやキラグッズ、そして本棚に原作本と同人誌がズラッと並んでいる。

俺は思う、宮木はせまく深いな。

ちなみに俺は広く深い。

「宮木は誰が好きだ？」

「アタシは、ヤミーが好き。」

ヤミーはツンデレキャラとして出てきているが出番が多いとは言えない。

「そうか、俺はミルギとか好きかな。」

「ああミルギもいいかも」

ミルギはおっとりしたキャラでドジっ子と言っまあよくあるキャラだ
「所で、今なに見てたんだ？」

俺が画面を指さし聞くと

「今第2期の5話を見てたところ、」

「何通り見た？」

「20通り位かな。」

ちよつと偉そうに言うが、俺の方が上だな

全アニメ最低でも25通りは見る……が

「凄い見たな、」

「でしょ？アタシはソレほど愛が深いのよ。」

と言うかなんで25回も見れるか、疑問に思う人もいるでしょうから説明。

授業中に顔を伏せているのは寝てるのではなく、アニメを見てるから
ちなみに、イヤフォンを付けているが、髪が長くて耳が隠れてい
るのではない。

「最新のフィギュア買った？」

「勿論、買った。」

「じゃあじゃあ……キャラソンCDは？」

次々と質問してくる宮木。

宮木と話しているとドンドン時間が過ぎて行く。

《ピピピピピ……》と突然俺の時計が鳴る。

時間を見ると19時になっていた。

この時間はいつもアニメを見ている。

「もうこんな時間か……そんじゃ、そろそろ帰るわ」

「ええ？もう帰っちゃうん？」

何か寂しそうに言う宮木、だが俺は気にせずドアノブに手をかける。
・・・が

鍵、解除して。

20時。あの後結局出る事が出来ずに

俺は宮木の話しに付き合わされた・・・が

「明日学校で話そう」と言ったら帰してくれた

家に帰り最新話のアニメ（何回も同じ回）を見る

そして翌日——土曜日。

カレンダーを見た俺はやってしまった感があった。

そして月曜日。いつもあいている席には宮木の姿があった。

「なんで土曜日来なかったん!？」

教室に入ると怒鳴られる俺。相手はモチロン宮木

はあと溜め息をつき、俺の席に着く

「昨日は学校休みだろ？」

「でも明日学校で話そうって!」

怒っているようだが彼女の表情は金曜日に始めてあった時とは違って
明るかった。その笑顔が俺にはまぶしすぎた

「良いだろ、学校なかったんだから。」

「嘘つき!ヤスのバーカ。」

?ヤスのバーカ?そう笑顔で言った宮木だが、これを無表情で聞いた
このがあるような気がした。そう遠くない過去、数か月前位だったか
・・・確かあれは・・・いつどこで聞いたんだ?思い出せそう

で思い出せない。いやきいてないような気がしてきた。読んだ・
？そんなの読む訳が・・・
俺の脳裏をよぎる記憶・・・

もし宮木が居なかったら俺はまだ。

武藤とAKD49（前書き）

AKD49は凄く似ているAKB48とは全く関係ありません。

武藤とAKD49

宮木を学校に引きずり出してから

ずつと宮木のアニメ談に付き合わされてほとんどのアニメを見ていない

そんなこんなで、ちょうど一週間がたつ。

カタカタカタ・・・

誰もいない学校の中庭にパソコンのキーボードを打つ音が響く
勿論俺のパソコンだ。

画面には今日の深夜に放送したアニメの18回目が映し出されている
ちなみに説明しなかったが俺は17歳高校生だ。後一年だよ！楽しみ
と急に俺の前に人影が現れた。

コレも説明してなかった担任教師の鈴木先生。(♀)だ

「佐藤君。また学校でアニメを見てるんですね!？」

「ああ?ああ・・・そうですね・・・」

ちなみに今週この人に没収されたパソコンは9台。

俺はそれを思い出し、ベンチからすつと腰を上げる。

パタンとパソコンを閉じて・・・ダツシュ!!

「こら!待ちなさい。」

「おいつけるもんなら追いついてみる!」

ここでバカにしたのが悪かった。

「言いましたね?本気を出しますよ。」

そう言うと、鈴木先生が全力ダツシュで俺のところに飛んてくる。

俺も負けじと走るがパソコンが邪魔だ。

ふと後ろを振り返ると、先生は居なく、静かだった

「はあ、逃げ切ったか・・・?」

と溜め息をつきながらベンチに腰を下ろそう前を見ると。

目のまえにババア(鈴木先生)が立っていた。

生徒指導室（今週10回目）に入り、鈴木先生の有りがたい説教をもらう

「で、先生。今までのパソコンは・・・？」

「あれはわたしが分解して、ガン。ムを製造しています。」

「個人的にエヴ。初号機が好きです。」

「ガンダ。世代ですから。エヴ。もいいですねどね。」

「。ヴァは素晴らしいと思います。まあ。ンダムも捨てがたいですけど。」

と俺のパソコンを奪い取った鈴木先生がガ。ダムの事を語ってくれた。

別にどうでもいい。

「で、そのパソコンの却ってくる見込みは？」

「そうですね。」

と言う事で俺は俺のパソコンを取り戻すためにガン。ムに乗り込んだ
「佐藤行きます！！！」

なんて幻想は捨てて、俺は2年B組に来た。

何かまた面倒な奴が居るらしい。

そいつの名前は『武藤治弥』どうやらそいつを現実に取り引きずり出してほしいらしい。

と言うかこいつも二次元やろうなのか？なら俺でも簡単に

「失礼します。B組の武藤君いますか・・・？」

俺は面倒くさそうにB組に呼び掛ける。

「・・・武藤？」

「え？あいつ生きてるの？」

すると教室中がざわめく。何だ？いじめられてんのか？

「ええ・・・と、武藤は？」

俺は全く顔を見たことない男子生徒に聞いてみると

彼はすつと指さす。その先には眼鏡をかけて真面目そうな顔をした男子生徒が居た。

しかし彼の机には、マジックで書かれたであろう落書きやら

花瓶が添えられたりしていた。

はぁ・・・とため息が漏れる

俺はその日の放課後に武藤君を尾行した。

しかし、なぜか

「おかしい、視線を感じる。」

俺が尾行している武藤君はこちらに気づいている様子がない。

だとしたらだれが俺を見ているんだ？

ま、俺は二次元野郎だからそう言う妄想するときがあるから気のせいだろ

と思い俺は彼の尾行を続ける

彼の家は借家で同じ形の家が数件並んでいた。

家の中に入るのを確認した後、俺はインターフォンを鳴らそうとする、がやめる

なんで毎回ここでやめるのか。今回は前回とは違う視線を感じるんだ、さっきの

ふと後ろを振り返ると、電柱のかげと言うベタなところに人影があった

と言っても俺も電柱のかげに隠れてただけ・・・

「だれだ？」

上から読んでも下から読んでもだれだ。

俺は電柱の方へむかった。

そしてそこに居た人物は――

「何だ、宮木か」

そう先週俺が学校に引きずり出した宮木だった

服装が制服のところ、帰宅せずに俺を付けていたとみた

「なにしてんだ？」

「追尾、尾行、ストーカー」

俺はケータイを取り出した

「もしもし、警察ですか？——ストーカーです」

思わず、学年主席の女性に不法侵入された最下位クラスの代表のような行動を取ってしまった。

「貴方もストーカーでしょ？」

「失礼な！俺は……そうでした。」

宮木にわけを話して、もう一度インターフォンを鳴らそうと手を伸ばす

ピンッ ま、よくあるチャイムで押す時にピーン、離すとポーンとなるやつがあるが

今回は押しても離しても『ピンッ』と一回鳴っただけ

「しょぼいインターフォンね」

「そう言うな。」

そして少し待ってから扉が開かれたが、完全に開かずチェーンがかっていた

「スイマセン、むと——」

武藤君いますか？そう言いかけた時

「あなた方は私の息子をいじめて楽しいのですか！？」

といきなり怒鳴られてしまった。

家までイジメられてるのか……？

「あ、いえそうじゃなくて、俺は……武藤君の友達で……」

「そんなはずありません！息子には友達なんていませんから！」

おいおい、母親のくせにそんなこと言うか。

と扉の向こうを見ると、制服姿の武藤君がこちらを悲しい目で見て

いる

「あの取り合えず、むと——治弥君に合わせてください。」

「あの子は今誰とも会いたくないの！帰って頂戴。」

色々勝手に決めつけている母親にだんだん腹がたってきた

しかし、何を言ってもききそうにもないので今日は引き上げる事にした

「どう思うよ・・・？」

「どうって何が？」

俺が宮木に質問するとまあそう返されるであろう答えランキング（集計は俺）4位の答えを出してきた

「だから、あいつの母親。なんで勝手に決め付けるんだろう・・・って」

「ああソレは息子への愛だね」

得意げに言う宮木だが俺は意味がさっぱりだった

「つまり、母親は息子がこうであってほしいと思ってるってことだよ」

「ええ・・・と誰とも会いたくないと思ってるって事か？」

「ま、そんなとこ」

いや、さっぱりわからん。ま、つまりは親に縛られてるって事か？さあてどうしようか、今日が金曜じゃなきゃなあ・・・

そして土日は彼の家に行く事は無く、宮木からのしつこいメールにうんざりしていた

月曜日。俺は鈴木先生のもとへむかった

「先生。彼は強敵。頑張りましたが無理でした。パソコン返してください。」

「嫌です。」

即答かよ。俺は本当に頑張ったけど。

「じゃあ先生。あの母親を何とかしてください。」

「あの人は、モンスターペアレントなの。」

「何それ・・・？」

ペアレントは両親、親って意味だよな。そのモンスター？

「わかった！彼がモンスターで、母親がその進化モンスターだ！」

「違います。モンスターペアレントは・・・」

と15分くらい猿（俺）にもわかるモンスターペアレント講座を聞かされたあげくその母親はどうにも出来ないときた。ホントに頼む時は土下座するのに、それ以外は役に立たない野郎だ。まず教師は生徒の見本になる存在。簡単に土下座何かするもんじゃない。

「仕方ないわ。家にあるガン。ムのプラモあげるか頼むわ」

「今度はモノで釣るのかよ。しかもたいがいのプラモはコンプしてる。」

俺をなめるな。一人暮らしなのをいいことに部屋中プラモやフィギュア、ポスターに原作本に同人誌、DVD & blue rayやら色々ある。

「ソレじゃあ一ついいこと教えてあげるわ。彼は——」

無理だ。絶対無理だ。AKD49ってアイドルじゃん！

俺はアイドルとかはボカロだけなんだ。

第一に三次元じゃん！無理だよ——そんなの無理だよ！

仕方ない、またパソコン買つか・・・チッ

全財産足してもパソコン一台も買えない。

「仕方ない。まず母親から説得するしかないか。」

こうして俺の母親口説き作戦は始まった・・・が

「俺は人妻好きじゃない。」

勘違いされるとアレだから作戦名変えよう。

「うーん。母親おとし作戦・・・？コレも変わらん。」

ぶつぶつ念仏を唱えながら歩いていると校門で宮木が待っていた
「遅かったわね。」

「・・・母親尾行作戦・・・？」

「おい。」

「母親暗殺・・・ダメだ。よさそうだけどダメだ」

「おい！佐藤！」

耳元で叫ばれては無視できない。

「何だ、うるさいな。」

「今無視してたでしょ？また、不登校になっちゃうよ？」

「はいはい。勝手にどうぞ。」

本当にうるさい。俺は耳をふさぎながら武藤君の家に向かった

「また行くのか？」

「ああ行く。」

「アタシもイっていい？」

「お前は何処にいくんだ！？」

そんな漫才をしながら歩いて約10分。俺らは武藤宅に到着した
今回はとつとインターフォンを押す。

また昨日のようにチェーンが付いて母親が出てきた。

「スイマセン、治弥君います？」

「また来たの！？こりなわね。」

「別にイジメに来た訳ではないです。」

「なら、何しに来たの！？」

母親が怒りながら俺らにそう言う。しかし俺はなんて答えていいかわからない

「ええ・・・とはいっ」

と宮木の後ろに回り、ポンと宮木を付きだす。
ギツと宮木に睨まれる。

「あ、あの・・・あ、遊びに来ました。」

おどおどと言う宮木にギツと睨みを入れる母親

そして大きな声でこう言った

「ウチの息子は一人がいいの！ほつといて頂戴！」

そう言うて扉を閉めようとする母親。俺は慌てて扉の隙間に足を入れ閉じさせないようにする

「孤独を好む人間もいるが孤独に耐えられる人間は居ない」

俺はそこでアニメの台詞を口にした。

そして母親はふんつと鼻で笑い、俺の足を蹴って隙間から外し、扉を閉める

今日も無理だったか・・・と諦めかけた時

ガチャンツと言う音がして扉が開いた

「汚いところだけど、座ってね」

そう言うてリビングに入る。とても綺麗に片付いていた。

「それで、君たちは本当に治弥の友達なの？」

「ハイ。そうです。」

俺は質問にはつきりと答える

すると母親がため息をつきこう言った

「有る時からあの子にそうで有ってほしいと思い始めたの——」

彼はAKD49が大好きで、部屋もCDやポスターが貼られているらしい。

しかし母親はそれを認めることが出来なかった
もともと成績がよく真面目だった息子。それが急にそんな方へ走って行ってしまったのだからそう思う気持ちはわからないでもない。

そしていつしか、自分の思い、理想を彼にぶつけていたらしい。

自分がうまくいかなかった分彼に期待し、父親の会社が倒産した時も彼を期待した。

そんな感じで期待し続け、重いものを持たせ過ぎた。

彼は2年になつて生活態度が悪くなり、周りから友達が離れて行き、ソレが許せなかった母親はすべてをAKD49のせいにして部屋のポスターをはがしたりグッズもすべて捨てた。

ソレが悔しかった彼はもう一度すべてのグッズを買い、さらに深く引きずり込まれてしまったらしい。

「ソレは全部貴方がわるね」

宮木も同感だったらしく母親にそう言う。

「そうだな、取り合えず、治弥君に合わせてください。」

そう言つて僕は彼の部屋に向かった。

彼は引きこもつてゐるわけではないが、部屋からは俺や宮木と同じ感じが漂ってくる

「入るよ、はるちゃん」

そう言いながら引き戸を引く母親。そして部屋の中を見た瞬間に顔をそむけリビングに帰った。

「武藤君。」

「キミたちは金曜にB組に来た・・・」

PSPを持つている彼がこつちに近づいてくる。

「出てけ。僕はキミたちと話す事は無い」

はあま、俺らと話が合うかわからんが・・・

「ま、待てせつかく来たんだから、」

「そうですね。パーっと明るくやりましょう。」

そう言う宮木が無理やり部屋に上がり、ソファにドサッと腰をおろした

「お前、母親に期待されてよかったな。」

俺もソファに座りながらそう言うのと武藤が顔をしかめた

「いいわけ無いだろ！！僕だって、出来る事と出来ない事があるんだ！」

PSPをたたきつけるように置いて俺に向かって大声で叫ぶ。

「そりゃそうだろうな。人間だから。」

「でも、親の期待にはこたえないと・・・」

さつきまでの勢いがなくなり、表情が曇る

「期待にこたえて何になる？」

「そ、ソレは・・・」

「母親がうまくいかなかったら問題点を改善すればいい。父親の会社が倒産したら新しく仕事を探せばいい。全部お前がやる事じゃない。」

今の俺カツコよくね？と自分でもい顔がどや顔になるのがわかる

「でも、お母さんは何でも僕に期待してくれるから。」

「だったら、母親に言つてやればいいだろ！？少しの期待があればそれいいと思う。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だから俺はお前に期待する。小さな期待だ。」

——全部一人で背負わない、普通のオタクになってくれると期待してる。

バンと引き戸をたたくように開き、走って行く武藤君。

俺はそのあとを追った。

「お母さん。僕はお母さんの期待してるような人間じゃない！」

「はるちゃん・・・」

武藤君が真剣な顔をして母親と向き合っている。

「でも、期待される人間になる。大きな期待にはこたえられないかもしれない。沢山の期待にはこたえられないかもしれない。でも、

それでも僕は期待には精一杯答えて行きたい。」

答えられないのか、答えられるのかわからない、その答えは正真正銘、武藤治弥の答えだった

「はるちゃんゴメンね、コレからプレッシャーになるような事は言わないから。」

「ううん。良いんだ。こつちも期待にこたえられなくてゴメン。」

もう俺らは必要なさそうだと思い俺と宮木は黙って家を出た

「なんだかんだ言つて、今回は家庭事情だったからよかつてケド。」

「ケド・・・？」

「俺はAKD49苦手なんだよ。ホントにその話題が出なくてよかった。」

俺と宮木の影が前に長くのびて、周りの道は赤く染まっている
すると後ろからもう一人分の影が伸びる。

振り返るとそこには、夕陽で赤くなつた武藤の姿。

そしてその表情は影になっていたがはつきり見えた。

さつきとは違つた笑顔だった。

「先生。解決しました。パソコンを返してください。」

「そうですね。彼はあの後積極的に他生徒に話しかけるようになって元気になっているところを見ると、解決したんでしょね・・・。
いいでしょう。返します」

そう言つて返してくれたのは1台。

「後9台は？」

「え？誰も10台全部返すとは言つてませんよ？」

くそお騙された。今回の仕事はたった1台分か！？

「はあ仕方ない。いつか返してもらうつからな？」

そう言い残し生徒指導室を後にすると、目のまえに二人のオタクが
立っていた

佐倉とヘルシュト

第3火曜日の放課後、俺は誰も部員が居ない文芸部の部室に居座りアニメを見ている

最近気づいたこと、ここは誰も使っていないから人が来ない。よってアニメを見るならここが最適と言う事だ

ここを俺の部屋にしてもいいのではないか。

「ソレは自分勝手ですね。」

と当然のように隣に鈴木が居る。そして俺はまた口に出していたようだ

「ソレじゃ、俺は文芸部に入る。それなら良いんじゃないか？」

「でも、顧問も部員もいないわ、それでは認められませんか。」

と、そこで俺はすつと立ち上がり、パソコンを閉じる。

そのまま出口に向かい、扉を開く。

「それでは俺は帰りますんで……ダッ！」

俺はパソコンを鞆にしまい。全力ダッシュで逃げる。

ちなみに今まで逃走をはかったが、一度として逃げきった事がない。

「今日が逃走成功記念日だ！」

しかし後ろから追って来ている気配がない。

これまでに数回後ろに姿が見えない事があったが、それで突然目の前に現れて捕まると言う事があった……つまりここは……

「戻る！ソレが正解だ。」

俺が急いで文芸部室に戻ると

そこには

「お帰りなさい。さあパソコンを渡しなさい。」

「なんでだ——！！！」

くそ、裏の裏をかかれた

「コレで13台ね、」

「俺の金がドンドン無くなっって行くのだが？」

「わたしもお金に困ってるの、売りに行こうかしら？」

なんて人間だ！こいつは。人の物を奪って売って売ればくとは・

・

「あ、そうだわ、いい事を考えました。」

「貴方様のいい事は俺にとって悪い事です。」

案の定、いい事は無い。

文芸部の顧問が実は鈴木だったらいい、そして部員が居なく、廃部になった

そこで、新しい部活を作る（文芸部はつまらないからそれ以外）そしてこのパソコンはその部活の部品として使用する。

部室内では自由に使えるが持ち出し禁止。

しかし、部員は最低でも4人必要。

「うーん。後一人どうにかしないと。」

宮木と武藤を引き込み、俺を合わせて3人

「顧問は鈴木さまがやるんですよね？」

「頼みもしないのに、自己中ですね。」

何だこの女。

「そうね、土下座でもすれば——」

クソ！あの女ぜってえ教師に向いてない。

俺はぶつくさ言いながら二人を探す。

ま、屋上に行ってみて、見渡せばどっかにいるだろ？

あ、電話すればいいんだ。

「……アもしもし？」

『なに？ヤスどうかした？イベントチケットが当たったとか？』

「残念だが違う。今どこにいる？」

『図書室に治弥と一緒に居るけど……どうしたの？』

「そうか、一度部室党まで来てくれ」

俺はそう伝えるとケータイをしまった。

と、俺も部室党にいかないと、屋上まで来ちゃったからな

部室党に戻り二人を待っていると

「ねえ先輩。」

と何処からか、声が聞こえた、俺に話しかけてるのだろうか？

あたりを見渡すと隣に中学生くらいの身長の子が立っていた。

校章を見ると、色が赤色だった。

確か校章の色は学年ごと違って、俺ら二年が青、三年が黄色、一年が赤だったはず

と言う事は彼女は一年か。成長が止まってるのか？

「失礼ですね。成長はまだ・・・」

「あ、また口に出してたか。ゴメン」

しよぼんとした顔をする彼女に頭を下げる。

すると、そこにタイミングよく、いや悪く

「ああ女の子泣かせたあ」と宮木

「感心しませんな。」と武藤がやってきた

「ああ・・・う、うん」

二人も来た事だし、部室に向かう。

「それで、キミ名前は？」

「ウチは佐倉桜」

「サクラサクラ？」

ややこしい名前を上げてきた佐倉。いやまあこう言う名前のやつもいるのか？

そう言えばこのあいだ『苗字と名前あわせて二文字同好会』ってのがあったな。

会員の名前が全員苗名二文字のやつらばかりだった

「取り合えず、部室に入ってくれよ。」

扉を開く。中には鈴木が居ると思ったがいなかった。

「あいつ俺に押しつけて帰りやがったな」

まあいい俺は椅子に腰をかけて

その他メンバーも座らせ、部活の事を話した

「で、その部活はなにをするんだい？」

そんな質問を投げつけてくる

「取り合えずお前等もパソコンを自由に使えるから。」

武藤を華麗にスルー

強制的に三人を入部させた・・・ん？三人？

「あ、ゴメン佐倉の事忘れてた」

「ああウチも入部するから大丈夫。」

入部してくれた佐倉だが

「で、俺に何か用だったのか？」

「あ、その事なんですけど、先輩・・・」

バッグから何やらでかい機械を取り出した佐倉

それをテーブルにドンと置く。

「・・・コレは？」

「ハードです。」

は？・・・ハードウェアは本体みたいなもんだよな。

「PS3です。」

ゲームのハードか、そのでかいのをいつも持つてるのかと疑問に思う

「そうですね、いつも持ってます」

「あ、答えちゃうんだ。もう俺の独り言は無視していいよ」

こくと頷く佐倉。

「それで、そのハードをどうするんだ？」

「・・・」

「ここにテレビ置いてやるとか？」

「・・・」

「・・・ねえきいてる？」

佐倉が宮木の耳元でこそ話をしている。

ん？なにを話しているんだろうか

「ねえ無視してもしつこい変態がうつとうしいって言ってるけど・

・」

「ソレは俺の事か！？無視してって言ったのは独り言だけ！」

「あれ、独り言じゃなかったんですか！？」

「どう考えても、語りかけてただろ！？」

一気に疲れてきた。

気を取り直して佐倉に向き直る

「それで、ソレどうするんだ？」

「実は、ウチ・・・ものすごいゲーマーなのです。」

「ま、そんなんだと思ってたよ・・・ね、皆・・・ってええ！？なに各自本読んでんの！？この面倒くさい子俺に押しつけるの！？」

宮木は同人誌、武藤はアイドル雑誌。

「で、佐倉・・・どうしたいの？」

「うう・・・」

俺がきいただけで涙目になってきた。

「おわっ！泣くな。——二人もそんな目で俺を見るなら何とかしてよ。」

「勝てないんです。アスナに・・・」

「は？」

小さくつぶやいた佐倉の目は涙目ながら真剣だった

佐倉は去年、このゲームに出会った。

『ヘルシュト』ま、シューティングゲームだ。

ゲームはよくわからないが、オンラインでチームを作りそのチームで相手チームと撃ちあって先に全滅させた方が勝ち。ってやつらしい。

そのゲームでアスナと言うプレイヤーがいてそいつにメッタボコに

されたらしい。

ソレが悔しくてオタクだと言う俺らに協力を求めてきたということだ。

て言うかなんで俺が二人を学校に引きずり出したほどのオタクだつて知ってんだ？

ああ鈴木か。

「んじゃま、。部第一活動としてネットゲをやる。」

俺の掛け声でみながこくと頷く。

さて、パソコンもらってこないと。

俺が部室党を後にしてわざわざ遠い職員室まで行った

「スイマセン、鈴木先生はいらっしゃいますか？」

「うーん。さつき部室党に向かったけど……」

入れ違いかよ！！

渋々部室に帰るとそこにはパソコン（俺の）が人数分そしてなぜか鈴木の方も置いてあった。

「おい、なんでお前も使ってるんだ？」

「お前とは失礼ね、一応顧問なんですが……」

もういいや、こいつは放っておくか

「さ、皆起動させる。」

USB口にコントローラー（佐倉所有物）を付けてゲームを起動させる

「まずはアバターを作れ、佐倉は自分の使っているものでいい」

こうしてまず俺らはアバター作りに取り掛かった

「こう言う感じか？」

「こうかな」

「こうかしら。」

皆それぞれのアバターが完成したようだ。ソレとなんで鈴木までやってるのはツツコまなかった

「皆、似てる感じにしたか・・・？」

武藤は眼鏡をかけていてまあ似てると言えば似てるけどなんかカクカクしてポリゴンみたいだった。

宮木は何処かで見た事のあるキャラに似ている。アニメミッドナイトのヤミーだ。

そして鈴木。なんか機動戦士のあれに似ている、いやそのものだ。

「お前等ふざけてるだろ！？佐倉を見習え！」

まともだと思い佐倉の画面を覗く。

服装はバニーガール、顔面は男面のケツあごそしてマッスル。

「ダメだ！！！！こいつら戦うきない！！！」

俺が手を額に当てると宮木が俺の画面を覗きこんでくる

「貴方はどうなのよ・・・？」

「俺は普通だ」

「アタシには新世紀のあれの初号機に見えるのだけど・・・？」

あれ？おかしいな。

「ああもう、皆それでいいよ。どうせアバターなんて形だけだから。」

「もうここは戦場だ！命を落とすなよ。」

俺ら5人と相手5人の大戦がはじまった。

「ここまで、長かった。」

「確かにそうだね。」

「対戦を申し込んでも、承認してくれないんだもん」

アバターの見た目がアレだから、むこうも悩んだのだろう

「でも、今となつてはどうってことは無い！行くぞ！」

「・・・おう！！！！」

各自バラバラに散り、相手を見つけ次第、撃ち殺す作戦。
ちなみに指揮は鈴木。

俺が瓦礫の壁に隠れ身を隠す。

相手の気配がない。ここにはいないのか……

しかし油断はたいてきた

そして遠くから微かに爆発音が聞こえた

「敵か!？」

俺は無線で連絡を取る。

『せ、先輩ウチの無念晴らしてください……』

「よっわ!!お前弱ッ!!!」

無線の向こうで佐倉の悲鳴が聞こえてきて、人数カウンターが1減った

「いやあいつはゲーマーだ、そいつが負けるとなると……」

『ああヤバいかもしれないな。』

無線で武藤からの連絡が入ったがスルー

取り合えず、戦力が減った分相手を倒さないと。

ガサッ。——— 気配!？

バババババババババ……

俺は後ろに銃を連射する。

すると見事ヒットした下手な鉄砲も数撃てば当たる

ドサッと倒れ込む、敵。アカウントはアス力。

「隊長格倒しちまったああああ!!!!!!」

俺はあっさりとチームリーダーを倒してしまった。

『こちらキョウコ。敵を殲滅。』

『こちらハルヤも同じく。』

えええこいつら結構弱いんじゃない？

ちなみに俺のAvatarはエ。アの初号機だが相手は人間。これではロボットVS人間のようなものだ、見た目は。

『鈴木!行きます!』

ドゴオオオオン……大きな音と共に相手の兵士は全滅した。

「いやった——！勝ちました！ありがとうございます。」

大はしゃぎする佐倉。

「こいつら実は弱いんじゃない？」

「いいえ、そんな事はありません。」

「でも、こうもあっさりと・・・。」

「ソレはアバターのせいです。」

「アバターのせい？」

俺は聞き返した、アバターの見た目と何か関係があるのか？

「アバターはアバターの形によってパワーが変化するので・・・たぶん。」

俺は最後なにを呟いたのか聞こえなかった。

そして画面を向き直ると相手からのメッセージが届いていた

『いやぁお強いですね。我々初心者です故、未熟ですが楽しかったです。』

「初心者？おい、佐倉どう言うことだ？」

「あれれ？おかしいですね。そんなはずは・・・あ！この人アスナじゃなくてアスカだ！」

「え？てことは・・・。」

「人違いです。」

俺ら4人は白くなった。

杉川と占い

「オタクラス!!」

「は？」

静まりかえる部室、いや雑音はある。

アニメやゲームの効果音にアイドルの歌。

本当にうるさいな。

「康君。オタクラスってなに？」

「オタクラス！」

「最近君は僕に冷たくないかい？」

「気のせいさ。」

気のせいじゃない。僕はAKDが大っきらいなんだ！

こんなやつと話が合うわけがない。

「佐藤変態。もしかして・・・ソレ部名ですか？」

「そのとおり！そして変態じゃない！」

今日の俺はハイテンションMax！

なんですか・・・て？今日、新アニメのDVDやCDが発売されるのだ！

「そしてコレからの活動方針は——未定です！」

「はぁ!？」

「予定は未定。って中学の時の担任教師が言ってたよ！」

そう言い終わると俺は急いで部室を飛び出した。

転がるように走る俺。

何度か人にぶつかりそうになるが見事にかわす。

そして・・・ドカッ！

「ツ——いててて・・・」

「貴方。死相が出てるわ」

ぶつかった相手にそう言われる。

つまり俺が死ぬと言う事か？

「あの、」

「何かしら。」

俺はなぜかわからないが彼女を呼び止めた。

何か、他人と違うオーラがある。

「キミ……」

俺はそこで言葉に詰まる。呼びとめたは良いがなにを言おうか
そして。

「あ、あんなところにさまよう亡霊が！」

明後日の方向を指さしてしまった。

すると彼女が明後日の方向に走って行った。

「……何だ？——それより急がないと！」

目当てのモノを買い、財布が一気に軽くなる。

心も一気に軽くなる。身体も一気に軽くなる。

気がつくと俺はベッドの上に寝ていた。

「んん……こ、ここは？」

身体が動かない。あたりをカーテンでおおわれている。

枕元にはナースコール。そこから導かれる答えは

「ここは地獄か。」

「なんでそうなるのよ！」

と隣を見ると宮木と武藤と佐倉が座っていた。

「ここは病院だ。康君は車にはねられたんだ」

「行くなら天国がよかった。アニメ天国に」

俺は再び瞼を閉じる。まぶたの裏にはさっきあった彼女の顔が浮かぶ

《貴方。死相が出てるわ》

そうかコレか。

「最後に、三次元やアイドル、アイドルオタクを消し去りたい。」

「ソレは遠まわしに僕に死ねと言っているのか!？」

「そうだよ!」

「ここは病院です! 静かにしなさい!」

俺の叫んだ声よりはるかに大きな声で怒鳴られた

「・・・ところで俺の買った物は?」

「ああコレの事?」

そう言う宮木の手には紙袋があつた。

俺はそれに飛びついた。

「コレだよ! 会いたかつたよ。」

「全く、コレだから二次元野郎は・・・」

と武藤がつぶやく。それを聞き逃さない俺

「ま、こんな腐ったリアルに興味があるクソよりはましだな」

「現実に戻れないアニメ野郎よりはましだ」

武藤よ、気付け。その言葉はお前の周りすべてを敵にするぞ。

「リアルの何処がいいんだ。」

「アニメの何処がいいんだ。」

睨みあうDEAD OR ALIVE.

「誰に譲れない物がある!」

「待て待て待て! 何かの歌詞になつてる!」

間に宮木が入り、終止符を打つ。

仕方ない、続きはまた今度だ。

「所で皆。部活だ! 黒髪のカルト好きそうな女生徒を探してくれ。」

「

「なんで急にそんなこと・・・?」

「そうですよ佐藤変輩。理由をください」

「理由は。そいつの事を知りたいから。そして変輩ツて何だ!」

俺はたぶん退院するまで動けないだろうし、こいつらに頼むか。

「ソレじゃ、行くからほら、ヤスも来て。」

そう言つて俺の手を引っ張る宮木。

俺は怪我に————アレ? 全然痛くないし、動ける。

「貴方は意識が飛んだだけで、無傷だったの」
「ええええええ！！休めると思ったのに！！！！」

次の日、俺は何の変わりもなく登校した。

「オタクラス！部活動を始めろ！」

「はい！」

と元気よく挙手する佐倉。

「佐藤先態。部名が気に入りません。」

「今度は先態かよ。佐藤戦隊。○レンジャー的な！？」

もうツツコミが面倒臭くなった。

「いいか？先日彼女を探すんだ！そして占いで大儲け——何でもない。」

彼女の占いで金を儲けて俺の物に……

そして武藤が挙手した

「その彼女なのだが……」

杉川玲子。2年E組。オカルト研究部所属しているらしい。

オカルトに興味があり休日は心霊スポットに回ったり

オカルトビデオを見たりと神社に行ったりしているらしい。

そして最近占いを研究し始めている。

「情報ごころろ。帰ってよいぞ。」

「なんで！？」

そう言い残し、さらに武藤を部室に残し、いや縛り、俺らはオカルト研究部に向かった。

部室の廊下を歩いて一番隅の部屋。そこがオカルト研究部だ。

俺を先頭に、扉を開く。

そして目のまえに入った光景は……

暗くカーテンが閉めてあり、変なかぶり物をかぶった連中と数本の

ろうそく。

本棚に敷き詰められた占いや心霊の参考書。

「あの〜スイマセン。」

俺が恐る恐る声をかけると、キッと睨まれる。
ぶっっちゃけ引く。

「杉川さん居ますか？」

俺が聞くと部屋の奥ですつと手を上げる馬の頭蓋すがいをかぶった人物
その人がこっちに近づいてくる。ああ怖い。

「何かしら？——貴方は昨日の……。」

「そう。ちよつといいかな？」

「告白かしら？貴方が振られる確率は99.9999%よ」

「告白じゃないし！あと0.0001%は！？」

すると後ろから佐倉がポンと肩をたたいて
耳元でこう言う。

「まだ好感度が足りない。今は出会い段階」

「ギャルゲーか！？俺はオタ眼鏡じゃない！」

顔に手を当ててあきれる俺。

ホントにこいつらに付き合っていると疲れる。

「さて、話を聞いてもらう。」

俺の真剣な顔（演技）にこくと頷く馬の頭蓋

コレで金儲けができるぜ！

所変わって旧文芸部室。新オタクラス。

「で、私わたくしに何か用かしら？」

「うん。お前にここで占いの館をやってほしい。」

俺の真剣な顔（本気）にフルフルと首を横に振る。

「なんで！？」

「顔に真剣みがない」

ええ！？さっきの演技の方が真剣だったって事！？
仕方ない。

「お願いだ。」

俺が頭を下げると後ろから宮木と佐倉にド突かれた

「貴方なんでそんなに占いにこだわるの？」

「いいだろ？別に。」

俺は二人を無視して、話を進める

「取り合えず杉川さんの占いは凄いんだって！」

俺が率直にほめると・・・顔を赤くしてくれると嬉しいのだが馬の頭蓋で見えない。

「一度俺を占ってくれ。」

こうして占いが始まった。

「貴方は強気なところがありますね。」

「うん。」

「しかしその一方弱気な一面も持っている。」

「おお！」

「苦手なモノはとことん苦手。だけど関わってしまう。」

「凄い！有ってるよ！流石だよ！」

始めて会う人にここまで言いあてられるとは、占いを見なおした。しかし周りの目が冷めきっている

武藤も眼鏡を光らせて目が見えない。

「皆も見直しただろ？コレが占いだ」

「一回、バーナム効果でググってみな。」

そうして占いが終了した。

「なんであんなに占いにこだわったんだ？」

武藤の質問。答えたくは無いが、仕方ない。

「占いやれば金が入るからな。」

「・・・そんな事の為に・・・？」

「勿論。皆もいいアイデアだと思うだろ？」

武藤、佐倉、宮木に囲まれた。

そのあと意識がなくなった。

身体全体が痛い。意識が遠のいていく。

三人に攻撃を食らう。

「お前はバカか！」

「最低です変態！」

「人間失格だよ！」

「貴方。死相が出てるわ。」

この後入院したのは言うまでもない。

二次元と三次元

なぜこうなった。屋上で俺と武藤がにらみ合う。

周りには、誰もいない、宮木も佐倉もあきれて帰ってしまったのだ。今こそあいつを消し去る時だ。

俺と武藤は同時に走りだし、右手を顔面に向けて投げ込む。

・・・なぜ、こうなった？

二次元世界は素晴らしいと俺は思う。

ゲームもたいがいは二次元だ、

この部活（？）オタクラスは腐れオタク（俺は腐ってない）が集まる部活

その中には二次元野郎二名。三次元野郎一名。ゲーマー一名。

ゲームも二次元に含まれる、よって――

『この部活は今から二次元同好会に変える！！！！』

俺は武藤を指さし、言い放つ。

「この部活。いやこの世界に三次元はいらない！！！！」

イヤ―フォンを付けて音楽を聞いている武藤が眼鏡をくいつと上げて鼻で笑う

本当にム力つく野郎だ。

「しかし康君。この世界自体が三次元。」

「だったら二次元にいけない。」

「そんな夢を見ているからダメ人間なんだ！」

「お前には言われたくない。」

「人を好きになって何が悪い！？」

「アイドルに恋して叶うと思ってるのか！？」

俺と武藤がにらみ合い、大声で言いあっている。

その隣では宮木と佐倉が嫌そうな顔をして耳をふさいでいる。

「二次元と三次元。決着をつけなきゃいけないようだな。」

「リアルにかなう訳がない。」

俺と武藤との間に火花が散る。

こいつの命も散ればいいのに。

「はいはい。ストップストップ。」

そこに佐倉が割り込んできた。

「二人で争っても意味ないでしょう。」

「そんな事はない！こいつを殺して俺が生き延びる。」

俺が武藤を指さし、佐倉に言う

武藤が眼鏡をくいつとあげ（この仕草が凄くうざい）鼻で笑う

「キミは簡単に死ねだの、殺すだの言うが、人の命は一つしかないのだよ？アニメのように蘇生したり、実は偽物、影だったなんて事は無いのだよ。」

ながながと説明してくれる。が、そんな事はわかっている

「まあまあ、アタシ達同じ人間でしょ？争うなんておかしいわ。」

「「「ああん！？」」」

宮木の一言に皆が食いつく。

「争わない人間などいない！」

「そうだ。おかしいと思っても争いが生まれる。」

「そうです。戦争だって無ければいいのに、有るんです！」

と三人を敵に回した宮木

「ああそうですね！？争いは無いほうがいいですが、生まれます！

それでいいでしょ！？て言うか話題がそれてるんだけど！？」

そこで我にかえり、武藤に向き直る。

「とにかく三次元に生きる者すべてを殺しに行く。」

「キミは殺人鬼になる気かい！？」

俺の冗談に本気で突っ込んでくる武藤。

「冗談だ。取り合えず皆熱くなりすぎた。落ち着こう。」

「『お前に言われたくない！』」

おかしいな。俺がなんかおかしい事言った？

取り合えず、皆椅子に座らせ、俺はホワイトボードの前に立つ。

「さあ、今日の議題は『二次元と三次元』だ。」

ホワイトボードに【二次元と三次元】と記入する。

「つまり、どちらがいいか決めると言う事だね。」

「ああそうだ。まず二次元組と三次元組に分かれる。」

まず、チームに分ける。チームはこうだ。

二次元組が俺、宮木、佐倉。

三次元組が武藤。

「なぜ、僕だけが・・・」

「ははは、ざまあみる！！！」

まあ目に見えた結果だ。

「取り合えず、始めよう。」

俺がホワイトボードの前に立ち、ペンをとる。

「僕は二次元がなくなっても構わないと思う。」

「はい、却下。」

「なんでだ！？」

本気で疑問顔を浮かべる武藤。こいつはバカか？

「お互い、相手の存在を否定するのはダメだ。」

「そうか、すまなかった。」

頭を軽く下げる武藤。

「じゃあ俺の意見いいか？俺は三次元がなくなってもいいと思う。」

と言いながらホワイトボードにそう記入する。

「言ってる事が違うじゃないか！！！」

「え？気のせいだろ？」

と、言いながら俺はホワイトボードの文字を消す。

「さて、お遊びは止めて、それぞれのいいところを上げて行こう。」

「三次元は実際に会える。触れる。」

取り合えず、記入する。

こんな意見はどうでもいい

「二次元はどんな事をしてても嫌われる事は無い！」

言いながら俺が記入し、先ほど記入した武藤の案を消す。

「ちよつと、なんでけすんだい!？」

「ああ？すまん。ついつかり。」

すると佐倉が渋々立ち上がる。なにをするんだろう。

俺の目の前に立ち、俺の顔を

「変態!!!!!!」

思い切りパーで殴ってきた。いわゆるビンタだ

「ウチが書記をします。」

と言って倒れている俺を蹴とばしてペンを奪い取った。

「お前はツンキャラか・・・？」

「はい。そうです。ツンです。絶対デレません。」

顔に手を当て、椅子に座る。

改めて、佐倉がさっきの意見を記入する。

「リアルアイドルを好きになってなにになる？AKD何か金がかかるだけだろう!？」

「アニメキャラを好きになってなにになる？二次元は実際に会えないだろう!？」

武藤が俺の方を睨んでくる。俺も勿論睨み返す

そしてつかみあいの喧嘩になりかけたところで宮木が留める

「アニメキャラは俺を嫌いになる事は無い。」

「だからと言って、好きになる事もない。」

「確かに、アニメはそうかもしれないませんがギャルゲや乙女ゲはそう言う感じですよ？」

と佐倉が話しに入る。

ギャルゲか、俺も少しはやるけど・・・オタメガネほどではないな。

「ギャルゲの話は置いておこう。」

「今は二次元の素晴らしさを語ろう。」

「いや、三次元の方が素晴らしいさ、二次元など無くても生きていける。」

「貴様！もう許さん。表に出ろ！」

「そうやって暴力で解決するのかい？やはり、二次元とリアルの区別が出来ていないカスだ。」

「ああ！？」

俺は武藤を部室の外に出し、胸倉をつかむ。

「お前、二次元を侮辱するまでか、俺を侮辱しやがって！」

「キミだつてそうだろう？」

そして武藤をなげる。

「AKD何か時期が来れば落ちこぼれる。」

「何だと！？」

俺らは広く誰もいない、屋上に向かった。

「お前は二次元の素晴らしさをわからないのか！？」

「ああ全くわからない。」

挑発するように俺に言う武藤。

俺は武藤にガンを飛ばす。

「言つてもわからんクスなら、身体でわからせてやる」

「ああそうかい。ソレじゃ僕も本気でキミに三次元をわからせてやる。」

武藤は眼鏡を取り捨てる。

その眼鏡が俺の足元に落ちる。

それを拾いなんとなくかけてみる

「・・・戦闘力5か。」

「僕の眼鏡はスカウターか！？」

俺は眼鏡もといスカウターを取り、武藤に向かって右手を投げつける。

ソレが武藤の顔面に飛び込み、武藤が吹っ飛ぶ。

「ふん、初戦戦闘力5。」

「コノ程度か……？」

武藤が立ちあがり、俺に突っ込んでくる。

その勢いに負け、俺はフェンスに背中から投げられる。

「ぬああ。腰が……。」

踏ん張りをきかせ、俺は立ちあがる。

なぜこうなった。屋上で俺と武藤がにらみ合う。

周りには、誰もいない、宮木も佐倉もあきれて帰ってしまったのだ。今こそあいつを消し去る時だ。

俺と武藤は同時に走りだし、右手を顔面に向けて投げ込む。

二人の手が互いの顔面に触れかけた瞬間――

「お前たち！いい加減にしな。」

屋上の入り口が解き放たれ、鈴木が顔を見せた。

俺が鈴木を横目で見ると顔面に武藤の拳が飛んでくる。

同時に俺の拳が武藤の顔面に入る。

俺ら二人が別方向に吹っ飛ぶ

「貴方達二人。ちょっと生徒指導室に来てくれる？」

首根っこをつかまれ俺と武藤は生徒指導室に連れてかれた。

そのあと説教を1〜2時間。

そして翌日、一日中、鈴木のパシリに使わされた

「ああ。疲れた――」

「全くだ。」

「もう三次元と二次元で争うのは止めよう。」

俺と武藤がぐったりと部室で潰れている。

それをあきれるように宮木と佐倉が見ている。

「三次元と二次元は互いが支え合って、成立している。」

「どちらかが消えればどちらも消える。」

部員全員が頷いている。

「それでは今回の議題の結論。」

【三次元と二次元は互いが支え合って、成立している。どちらかが消えればどちらも消える。リアルを愛し、二次元も愛す。コレオタクの基本なり。】

3日後この長々しい文面は皆の脳から消え去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0364z/>

二次元野郎と・・・

2011年12月10日20時54分発行